

資料(5)

八太舟三「サンジカリズムの検討」(昭和二年1927十月三十日刊・社会生理研究所発行)

序論

労働組合には一面労働者の利益擁護を目的として組織せられたるものと、他面共產主義の手先となつてゆくべく組織せられたるものと二種あるのであるが、その何れにも属さないで、資本主義と真向から戦うことを主義としたるものが、サンジカリズム組合であつたのである。然るにサンジカリズムの組合も近時次第にその旗色が曖昧となつて、一方利益擁護の組合となるか、他方共產主義に近く、何れかに傾きつつある現状を呈して來たのである。これはサンジカリズムが単に墮落しかけたものだけ見てよいが、それともサンジカリズムそのものに本質的に欠陥があるのか、吾人はこの点からして検討する必要があるのである。一つの主義主張が墮落するのは決して主義者や当事者が悪いばかりでなく、その主義主張に本質的に欠陥があつて、人心を永く靈感づけることが出来ないからである。これ吾人がサンジカリズムはか二三の主張を検討する必要があるところである。

一、サンジカリズムの歴史的意義(A)

サンジカリズムを検討するには、二つの方面からこれを見る必要がある。一つはその歴史的意義、二つはその思想的意義である。サンジカリズムの歴史的意義は何であるか。サンジカリズムは過去に於ける労働運動に如何なる意義を有するものであるか。

世界の労働運動は英国に発祥した。而して英国は世界の労働運動の実験室であつた。即ち英国に於いて実験せられたことが、世界に於いて再び経験せられているが如き観がある。何故ならば英国に於いて実験せられた労働運動は三様の失敗を嘗めて、遂に墮落し去つたのであるが、世界の労働運動も同型類似的の三様な失敗を繰返して遂に長夜の眠りに陥りつつあるからである。

英国に於いて政治革命が開始されたのは一六四二年であつて、これが完成を見たのは、実に一八六八年であつた。即ちフランス革命を遡ること百年である。従つて英国に於ける産業革命は列国に先んじ労働運動の機運も世界の何地よりも早かつたことは、今更言うまでもない。さらばこの先進英国の労働運動が果して何を經驗したか。曰く、三型の失敗である。即ち第一が選挙権獲得、二が経済行動、第三がチャーチズムである。英国の労働運動史は一八二五年より三十二年まで選挙権獲得のために戦つた。然しそれは徒勞であつた。今仮りに労働者が「普選」を獲得したとしても、それは矢張り失敗であらねばならぬ。さればこそ彼等は一八三二年より三十五年まで「経済行動」なるスローガンの下に、選挙権獲得を虚偽だと叫び今日のサンジカリズムと同様の進路を辿つたのであつた。然してこの戦闘的運動も支配者の苛酷残酷なる圧迫によつて潰れてしまつた。が、仮りに潰れなかつたにしても、経済行動だけで勝てる訳は

ないのである。然ればこそ一八三六年から二十年間に亘るチャーチズム運動が勃興したのである。チャーチズムは労働者の政治的権力の獲得を主眼としたものであるが、単なる選挙権の獲得とは異つて、これには非合法的秘密結社の運動を添加し〇〇的色彩を伴つていた。けれども、これも矢張り失敗に終わった。何故なれば、この運動は内部が二派に分裂して、暴〇〇の〇〇〇計画を唱導するものと、道徳的漸進主義者とが対立して内部から崩壊したからである。

斯くて英国に於ける一八二五年より五十五年に至る三十年間の経験の後、かの国の労働運動は漸時衰微して微温的改良主義が抬頭し、今日なおこの域から脱却し得ない。然り而してその後の世界の労働運動は常にこの型類を反覆する失敗の記録に外ならぬ。

マルクスはチャーチストの運動に刺激せられてこれを継承した形であつたが、間もなく変転して修正派の政治行動となり、更にこの反動としてサンジカリズムが勃興し、次いで大戦乱を機会にサンジカリズムは没落に瀕し、ボルシェヴィズムが興隆した。而してボルシェヴィズムはチャーチズムの如く、過激派と温健派とに別かれてモスコウ政府に内訌を生じ、その余派は現在のソヴィエト政策の延長を生じて、到るところに政治運動が盛んになり、次いでその反動として再びサンジカリズムが勃興しつゝある状態である。

然して労働運動のこの三様式は、失敗の三典型であつた。この類型が幾百年反覆されようとも民衆は断じて解放せられない。眞の民衆の解放は、斯かる類型とは全く異つた別種の運動に依らねばならない。クロボトキンが新しい進路を暗示した所以も茲に在る。

二、サンジカリズムの歴史的意義(B)

斯く観すれば、サンジカリズムは失敗的労働運動の第二型に属する運動であつてスコットが言つたごとく「サンジカリズムは他の労働運動の失敗と自己の運動の失敗と、二様の失敗を物語る」ものである。然るにこの運動を目して、バクニンによるアナキズムの運動であると論ずる人々もあるが、私は左様考えない。成程、第一インタナショナルの運動にはバクニン派がラテン民族の間に多くの支持を受けたことは事実である。また、「サンジカリスト紙」の一九二三年一月号に掲載せられた「旧インタナショナル」なる論文には明かにサンジカリズムがバクニン思想の派を汲んでゐることが述べられてゐる。ラッセルもそう論じてゐるが、サンジカリスト中には斯る議論をしない人々がある。モナットはその一人である。「ボルシェヴィズム」と言い、スバルタカスと云ひ、また我等のサンジカリズムと云ひ、何れも同一物の異名に外ならぬことを記憶せよ」と。更にゾムバルトは「サンジカリズムはマルクス派修正主義者に飽きたらずして、眞のマルクス主義に立戻つた人々である」と言つてゐる。仮りにサンジカリズムがバクニンの直系であるとしても、バクニンは多方面な人物であつて、ただ単にその中からインタナショナル運動だけを捕えて、これをアナキズムの全部とすることはできない。現に第一インタナショナル以前の闘士たるマテスターはサンジカリズムに對して、一九〇七年八月のアムステルダムに於ける国際アナキスト大会に臨み、一大警告を与えてゐるではないか（労働運動「本年七月号参照」）。また、何故アミアン大会に於いて哲学諸派なる名の下に、アナキズムを団体より排除したのであるか。何故クーファアとその改良主義者がアナキズムを攻

撃するにも拘らず、彼等を追放しなかつたのであるか。それがバクニンの流れを汲む人の仕事であるか。更にサンジカリスト中、その創設者であり、また、アナキストと言われているペルーチェはツール大会（一八九六年）に於いて「将来社会に到る途は漸次に準備さるべきものであつて、労働階級の知力及び道徳の発達によつて徐々に実現さるべく暴〇〇〇によるべきではない」と改良主義的見解を述べ、更に彼の遺著たる「労働取引所史」の中に於いては「労働取引所は今日より新しい社会の要素を漸次に精練し、更にブルジョア国家内に於いて眞に社会主義的な国家を構成し、資本主義的な諸団体、併に生産及び消費の諸形態を、これに對應する共産主義諸形態によりて、漸次にとり換へんとする思想をも発達させてゐるのである」と明言してゐる。サンジカリスト中、壮々たるアナキストと言われているペルーチェですら、この通りであるとすれば、それがアナキズムの運動ではないことは明瞭であつて、マテスターもクロボトキンもこれを承認してゐる。

ただ過去に於いてアナキストはサンジカリストと提携して來たのであるが、何人もサンジカリズムとアナキズムと同一であると言つた人はない。殊に這般の大戦乱を期としてサンジカリズムの形勢が大いに一変してからは、アナキズムとサンジカリズムとは提携しなくなつて來た。ロシアのナールバット・アナキストの如き嘗てはサンジカリズムを戦術の中に加えていたのであるが、一九二〇年九月の大会に於いてサンジカリズムと分かれたるが如きは、即ち、その一例である。

然らば、アナキズムが何故に嘗てサンジカリズムと提携し、何故に近時これと袂別する機運が動いてゐるかが疑問として残されるであろうが、之は第三章の「サンジカリズムの思想的意義」を精読することによつて氷解するであらう。

これを要するに、歴史的意義に於けるサンジカリズムは、政治行動に反動したる経済行動であつて、フランスのサンジカリズムも、一八三二年の英国のサンジカリズムも同一類型のもので、共に失敗を物語るものである。クロボトキンは「サンジカリズムが経済行動だけで行かば、労働者の解放はできない」と言い、更に「（この間、行抹殺）大地に叩きつけられない以上、労働者の解放はなし遂げられるものではない」と論じたのは経済行動の一点張りでは解放は失敗であることを物語つてゐる。

三、サンジカリズムの思想的意義(A)

以上観るところによれば、サンジカリズムは、一、理論、二、思想ではなく、労働運動の一傾向にすぎないものであるが、しかも労働運動が人間の自覚運動である限り、断じて無思想ではあり得ない。即ち一体系を有する思想でなく、しかも無思想ではあり得ぬところにサンジカリズムの弱点と破綻があるのである。換言すれば、サンジカリズムはそれ自身特定の思想では無いので、他の思想を背景に持つてゐるものである。さればサンジカリズムの思想背景は何であるか、私は之をマルキシズムのアナルキズムであると断ずる。即ちサンジカリズムはこの意味に於いて両棲動物と言ひ得るのである。今この点を検討すれば、サンジカリズムが階級闘争説をその根本主義としてゐることは、一九〇二年頃の傾向及びアミアン大会の宣言に於いて充分に窺ひうる。階級闘争説は言うまでもなく、近代資本

主義の勃興によって生産形式中に胎まれたる労働階級と資本階級とが根本的に利益が相反することとなり、新興労働階級は猛烈なる階級意識を生じて両階級間に闘争が開始せられ、労働階級はその団結の力による戦術をもって資本階級とたたかい、遂に最後の一大決戦をもって労働階級の徹底的解放を期せんとするものである。

この点に於いてはマルクスの学説が背景となっていることは勿論と言わねばならぬ。

サンジカリストの鉄道従業員機関紙の創刊号(一九一一年九月)には「サンジカリズムは社会主義の唱える経済学説と階級闘争説とを理解せよ」との純粋なる労働組合である」と書いてある。

これは明らかにサンジカリズムがマルクス主義を背景に持つことを告白したのと言って差支えない。

次に、サンジカリズムは少数者の「創造的暴力説」を採用している(断るまでもないが、茲に言うサンジカリズムとは、革命的サンジカリズムのことである)彼等の説によれば労働者の真の解放は意識的なる少数の闘士の勇敢なる創造的躍動によりて、多数者を熱狂せしむることにより達成せられるものであると主張する。

更にサンジカリズムは、資本主義の中に歴史的に胎在せる産業の要素を採り、分業制度によりて新社会の組織を経営せんとするものである。勿論、地方の要求を調査することを重んずるのであるが、然し経済組織としては分業制度を採り、生産者中心の社会を築き上げんとすることは明らかである。

この点に於いてはマルクスの経済学を始め一般の社会主義の経済学を背景にしているのである。

以上考察すればサンジカリズムはその根本思潮に於いては大部分をマルキシズムより採りそれにアナキズムの少数者の創造的暴力説を加したるに外ならぬのである。

四、サンジカリズムの思想的背景(B)

先ず階級闘争の問題より考察しよう。

抑、階級闘争なる語を用いて、絶対に利害相容れざる二つの階級とその闘争とを唱導したのはチャーレス・ホールと言う英国の医者であった。彼は階級を貧富の二つに分けて、両者は絶対に相容れないものであると考えた。その後、ルイ・ブランがブルジョアと民衆とを対立せしめ、ブルジョアとは「生産機関または資本を所有して自己の資料をもって働らく市民であつて或る一定限度内に於いてのみ他人に依存する人々を言う」また、「民衆とは資本を持たず、生活のために全然他人に依存せる市民の全体を言う」と定義した。然るにマルクスはホールやルイ・ブランの解釈とは異つて「ブルジョアとは社会的生産の機関の所有者であり、賃銀労働の雇主である近代的資本家の階級を言う。プロレタリアは自分自身に生産機関を持たず生活のためにその労働力を売るべく余儀なくされた近代的賃銀労働者の階級を言う」と定義した。これに依りてみれば、ホールの分け方は常識的で、ルイ・ブランのは政治的、マルクスの

経済的である。ホール流に考えれば、現在社会は二階級に分かれている。また、ルイ・ブラン流に考えても同様である。然るにマルクスの分け方に依れば社会は資本階級と近代的社会的生産に雇傭された工場賃銀労働者のみの階級と対立するのであるが事実、現在の社会では左様に対立していない。その何れの階級にも属しない民衆が非常に多いのである。

今、サンジカリズムの根本とする階級闘争の考え方をみるにそれはマルクスの説に拠っていることは明らかである。何故ならば、彼等が利害の絶対一致しないとする二つの階級はホールやルイ・ブランの言ったとき広義なものではなく、マルクスの定義した狭義なるものであるからである。而して、その闘争の方式に於いて政党と国家的手段とを排撃する以外に於いてはマルクスと同一である。否、彼等の「下より上へ」の意義は下部結構と上部結構とに社会を別かつマルクス流の唯物史観に外ならない。これゾムバルトがサンジカリズムを指して純真なるマルクス思想に立ち戻つたものだという理由である。純真なるマルキシズムとは、社会は経済組織を下部結構として、その上に依存し、上部構造は下部結構により支配せられると言う唯物史観の根本原理と、これより割出せる階級闘争説を言うのである。修正派やボルシェヴィズムに対して純真なるマルキシズムと言つたのである。而してこれがサンジカリズムの思想的背景となつてゐる。サンジカリズムが徹底的に経済行動を主張するのは、社会が下部結構によりて支配せられると言うマルキシズムを闘争の形式にあらわしたものに過ぎないのであつて、政治活動は下部の運動を捨てて上部の運動をすることとなるが故に、これを排撃するのである。斯るが故にロシアのサンジカリズムは「下から上へ」のサンジカリズムの標語を更に強く唱導する必要を叫んだのである。これがマルキシズムでなくて何であらう(階級闘争説に於いては茲に詳述する余白がない、「黒色青年」十月号を参照してもらい度い)。

次にサンジカリズムは労働価値論を採用している。労働価値論はジョン・ロックより出たる経済学説であつて、アダム・スミス、ブルドン等もこれを用いたのであるが、大成したのはマルクスである。労働価値説はマルクスに於いてその真意義を発揮し、マルクス以後の社会主義者は多くこの説を採用するのであるが、クロボトキンに絶対的にこれに反対をした。労働価値説は真のアナキズムに合致せず、マルキシズムに墮してしまふ(価値論については「労働運動」の本年八月号、九月号の拙文参照)。

他面に於いてサンジカリズムは少数者の創造的暴力説を採用している。これは一九〇〇年パリに於いてひらかれたC.G.T.の大会に於いて採用されたもので、意識せる少数の闘士の創造的行動によりて多数を熱狂せしめ得ると言うことである。これは明らかにブーゼット及びデレッサルによつてアナキズムの思想がとり入れられたのである。

斯くサンジカリズムには、マルキシズムとアナキズムとが混入していることを見るのである。

前掲の如くサンジカリズムは一面に於いて思想運動ではなく、而かも無思想であり得ないと言う弱味と、他面に於いて如上説き来つた如く正反対の二つの思想を背景に持つ弱味と、二重の弱味を有している。

サンジカリズムの運動が熱烈であり、闘士に傑出したる人物が多いに拘らず、次第に改良主義化せられたり、アナキズムと兄弟闘

係が保てなくなるのは、これがためであつて、階級闘争は多数を要し、少数暴力主義と合致するものではなく、それを無理に合致せしむれば、少数主義の熱は冷却する。而して改良主義に堕して行くことはマラテスタの言つた通りである。

五、将来社会に対するサンジカリズムの理想及びその危険——結論

サンジカリズムは将来社会を分業による生産組織となすことを主張する。如何なる生産でも社会に於いては手分けして生産せねばならぬことは言うまでもない。然しいわゆる分業は単なる手分けではない。分業の特徴は第一、労働を機械化する。第二、一つの生産に従事するものは他の産業に対しては責任と興味とを持ち得ぬ。第三、分化せる生産を総合するため、超越的総合機関を必要とする。紙面が無いから簡単に第三の点だけ説明しよう。分業では一つの生産の部門に対して理解と責任と興味とを持ち得ないから、一切の総合は生産に従事しない人々の集団によつてなさねばならない。斯る集団に権力が発生することは疑う余地がない。これに反してクロボトキンのコンミュニオン組織に於ては、自治的な小範囲に於て総合的産業が行われるから、民衆は一つの生産に従事しながら他の生産に直接責任と理解と興味とを持ち得るが故に、万民が生産しつつ総合し得て、特別な総合機関が必要でない。故に絶対に権力が発生しない。また、分業を基礎とする社会に於ては生産基本となるから、重要生産に従事するものは他の生産に従事するものよりも総合機関の上に権力を持ち得ることとなり、充分に階級発生を恐れがある。また、分業は「自分のみ必要なものは自分で造り、自分達に必要なものは自分達で造る」のではないから、生産と消費とが合致しない。即ち生産と消費との自由のないところに果して其の自由が望めるだろうか。

また、サンジカリズムは将来社会に、到る手段として労働組合による階級闘争によりて漸進し一般産業によりて生産機関を奪還したる後、既成組合より発芽したソヴィエトを建設することを目論むのである。然し如何なる純経済ソヴィエトでもこれを作ることに由つて権力が発生することは自明の理である。分業によらず内在総合によるクロボトキンのコンミュニオン以外にアナキの社会は真実望み得ない。要之、私は私の立場からサンジカリズムを検討したものであつて、更に私は現在の労働組合がサンジカリズムでなく、ボルシェヴィズムでなく、また改良主義でなく、アナキズムの方式と精神とによりて邁進せんことを冀うのである。(完)

(注53)「サンジカリズムの検討」は昭和二年(一九一七)十月三十日、社会生理研究所(八太舟三)から出版された。当時、八太は別にマルキシズム批判の目的で「唯物史観の検討」を刊行する予定であつたが果さず、のちに「サンジカリズムの検討」を増補改訂し、冊子名も「階級闘争説の誤謬」と改めて、全国自聯から組合叢書として昭和四年(一九一九)八月五日発行された。後者の内容は前掲の「サンジカリズムの検討」に新しくマルキシズム批判を増補したと見るのは誤まつてゐる。複雑な増補改訂が行なわれてゐる。史的にはアナキズム運動に大きな影響をあたえたのは前者であるが、現在の時点では「後者」の叢書のほうは群馬・黒色戦線社から復刻版が出されているが「前者」は出ていない。

資料(8)

マラテスタ、幸徳秋水訳「アナキズムとサンジカリズム」(明治四十一年一九一〇二月、平民新聞連載)

労働運動に対する関係地位の如何は無政府主義者に取つて確かに最大重要問題の一つである。

之に就ては長日月の討議と諸種の経験にも拘らず、今なお十分に意見の一致を見ることが出来ぬ——蓋し此問題たるや我等が戦闘に従事する境遇が異なり事情の変ずるために、到底一定不變の解決を得ることが出来ないものであるらしい。

而も予は我等の理想目的から割出せば、諸種の相異なる危機に際しても之に適用すべき行為の大体の標準を暗示し得べきことを信ずる者である。

我等は万人の道徳的及び物質的向上を望む、我等は万人に自由と安楽を与へべき革命を成就せんことを望む、而して我等は知る、是れ決して上より発せる法律命令の力に依て成すことは出来ないで、唯だ之を希望せる諸人の自覚せる意志と直接行動に依て成さるべきものである。左れば現在社会組織の爲めに苦痛を受けること甚しく革命に就て最大の利益を有する人々の自覚的随意的なる協同は、是れ我等の何物よりも必要とする所である。

出来る限り理想を完全にするに努め、伝道及び革命的行動のグループ(会盟)を作ること——確かに有益必要のことに違ひないが——之で吾人は足れりとすることは出来ぬ、吾人は出来得る限り労働者の多数を開悟せしめねばならぬ、何となれば現在の社会を顛覆して新社会を建設することは実に労働者に待たねばならぬ、而して平民の大多数を今日の卑屈なる境遇より喚起して、無政府主義の觀念と其の実行の希望を有せしむるに至るに要する進歩の道程は、一般に單純なる伝道の感化のみに依るものではない、却つて日常生活の事実より得たる教訓が、総て理論上の説教よりも遙かに有効なる者である、故に我等は直ちに進んで衆民の實際生活に参与せねばならぬ、而して事情の許す限りの有ゆる手段を用いて、漸次に反逆の精神を覚醒し、解放に至るの道を事実の上より教示せねばならぬ。

此等の手段中、労働運動は第一に位する者で、我等は之を等閑に付し去つてはならぬ、此運動に於て我等は、其地位改善の爲めに戦闘せる多数の労働者を発見する。彼等は其有する理想目的に就ても、又之を達する手段に就ても、誤まつて居るものもある、我等の意見よりすれば一般に誤まつて居るに違ひない、然れども少くとも彼等自身は決して圧制に甘んずるものでもない、其を正当とする者でもない——彼等は希望がある、彼等は苦闘して居る、故に彼等をして被掠奪者なる其同類労働者と親和し、圧制掠奪を憎悪するの感情を興起せしむるは、極めて容易のことである、斯くて彼等を率いて、人の人を制する一切制度を廢絶せんが爲めに一大決戦を試むるに至らしむべきである、我等は彼等を率いて層一層に其要求を多からしめ、層一層其手段を熱烈ならしめ、勝利に際しては、之を利用し

て団結と直接行動の力を伸張して、更に大なる要求を提起せしめ、逆境に会しては、亦之を利用して更に有力なる手段と更に急激なる解決の必要なるを覚知せしめ、斯く我等は今後の戦闘の爲めに我等自身も訓練し且つ他を訓練し得るものである。

且つ又労働運動は、技術的職工のグループ（会盟）を準備することが出来る、是等職工は実に革命の際に於て、政府の総ての権力に超越し、且つ之に対抗して、万人の利益の爲めに、彼等自ら生産交換の組織を形成し得る者である——此の点の利益も亦小さなものではない。

然れども一切此等の利益を有すると同時に、労働運動は亦其弊害と危険とを有して居る、我等無政府主義者として取るべき地位の問題を議するに當つては、亦此弊害と危険をも打算の中に置かねばならぬ。

万国に於て不斷に経験する所に依れば、労働運動は常に抗議と反抗の運動として開始され、其初めに於ては進歩と人間博愛の大精神に作興せらるるにも拘らず、直ぐに墮落の傾向を生じて来る、而して彼は其勢力を得るに従つて、利己的、保守的になり、殊に唯だ眼前の小利害にのみ汲々として、彼等自身の間に自ら一種の役員政治が発達する、斯る場合には例も勢力の拡張、利益の撰取ということが其唯一の目的となるのである。

形勢如此くなるより、従来多数の同志は自然に労働組合の運動を脱し、之を目して保守的な有害なる物として戦うに至つたのである、而も其結果、我等の勢力は漸次に衰滅して、彼の労働解放の方針とは何等の關係なき、唯だ一身上の若くは党派の利益の爲めに此運動を利用せんとする輩の自由に任すこととなつた、ソコで直ぐに姑息極まる、根本から保守的な一種の団結が出来た、トレッドユニオン英国労働組合は即ち其標本である。其他彼の政治屋、其多くは社会党なる政治屋の勢力の下に団結して、特種の人々に権勢を得せしむべき選挙機関たる過ぎざるシンジケート（労働組合）も其れである。

幸いにして其他の同志は、労働運動が常に本来に於て健全なる主義道理を保持せること、且つ之を政治屋策士の手に乗せんとし、寧ろ彼等を率いて今一度彼等の初志を貫徹するの事実に従わしめ、無政府主義の運動に就て彼等が提供し得べき総ての利益を獲得するを以て、策の得たるものなりと考へた、而して彼等は主として仏蘭西に於て、一箇の新運動の開始を成功した、此新運動は即ちレヴォール・シヨナリー・シンジカリズム「革命的新労働組合」なる名の下に労働者を団結し、一切紳士閥及び政治上の勢力と全く分離独立して、一に雇主に對抗する賃銀労働者の直接行動に依つて彼等の解放を勝ち得んとする者である。

是れ実に長足の進歩には違ひない、而も我等は余りに其効力を誇張して、或る同志等の如く、シンジカリズム（新労働組合）の進歩發達が無倫直ちに無政府主義の実現となるが如くに想像してはならぬ。熱れの制度組織でも其職勞を拡張したがる、其れ自身の命脈を永久にしたがる其れ自身を目的としたがる傾向を持つものである。左れば此新運動を開始し、且つ其運動に最も重要な地位を占めて居る人々が、シンジカリズム（新労働組合）を以て無政府主義と同意義の者、若くば少なくとも無政府主義の実現の爲めに、他の一切の

手段に代り得べき最上の手段と見做すの習いに陥いるのは、毫も怪しむに足らぬのである。而も此故にこそ、此危険を避けて、明白に我等の地位關係を定義することは益々必要になるのである。

シンジカリズム（新労働組合）は、其熱心なる賛助者の多数が、如何なる宣言を爲せるにも拘らず、矢張り其自身に於て、其職務の性質に於て、過去の労働運動を墮落せしめたる一切の要素を有する者である、所詮、労働者が現在の利益防衛を目的とする運動たる以上は、必然現在の社会状態に適応し、而して現在の儘の社会に於て接し得べき利益を打算せねばならぬことと爲るのである。

左れば今、一部の労働者の利害が全階級の利害と符合する間は、新労働組合は其れ自身に於て協同団結の好箇の学校である、一國の労働者の利害が他の諸國の労働者のそれと同一なる間は新労働組合は四海兄弟の主義を推展する好箇の方法である、一時の利害が将来の利害と矛盾することなき間は新労働組合は其れ自身に於て革命の好箇の準備である、而も不幸にしてイツも斯ういう訳には行かぬ。

全人類の利害の調和、協同団結は、我等が鼓吹する理想である。我等が努力せる目的である、然れども今日の實際状態に至つては左様は行かぬ、別種の階級間のみでなく、同一階級の人々の間ですらも左様は行かぬ、今日の大法は敵對争闘である、同時に又利益の交互相依である、而して実に各個は全体に對し、又全体は各個に對して争闘して居る、今日の如き資本家の生産組織——即ち生産機関の独占を基礎とせる生産、私人的雇主の利益の爲めに世界的に組織されたる生産——の結果として、為すべき業務よりも手多く、食うべき麵包より口多き社会に於ては、洵とに已むを得ざるの状態である。

各人の境遇は、多少直接に全人類の一般状態に支配せらるるものなる以上、個人としても、一階級としても、一國民としても、全く孤立することは出来ぬのである、左ればとて又自己を防衛するの必要あり、或は屢々他を攻撃し、若くば殺すことすらも必要ある以上は、真正の平和の状態に生活することも出来ないものである。

各人の利益は孰れも其雇われ口を確保するに在る、其結果として人は、其國の失業者及び他國よりの移民と敵對——換言すれば競争——することとなる、各人孰れも同職業の労働者に對して最上の地位を得、若くば保たんとを望む、高く売り安く買うのが各人の利益である、其結果として、生産者としての彼は、総ての消費者と衝突するの地位に立つ、而して又消費者としては総ての生産者と衝突する訳になる。

掠奪者に対抗する組合、約束、協同的戦闘——凡そ是等の物は、今日に在ては唯だ労働者が高尚なる理想の概念に鼓舞作興せられて、其一身上特種の利益を共同の利益の爲めに犠牲とし、一時の利益を将来永遠の利益の爲めに犠牲とするを覚悟する間にのみ、僅かに維持せられ得るものである、而して此の協同、正義、友愛の社会の理想は実に現在の制度組織に對し、一切の合法を無視せる破壊を行つて後、初めて実現せらるべきものである。

故に労働者に向つて這個の理想を提供すること、姑息なる眼前の利益を排しては将来永遠の大なる利益を示すこと、現在の社会状態

に適應することを不可能ならしむること、常に革命を招致し之を完成すべき伝道と行為の爲に働くこと——是等の事こそ我等が無政府主義者として、労働組合内に於ても又其以外に於ても兩つながら努力すべき所である。

トレードユニオン（労働組合）では是は出来ぬ、若くは極めて僅なことしか出来ぬ、それは現在の利益を打算せねばならぬ、而して此等の利益は、悲しい哉常に革命の利益たるものではない、それは余りに合法的範圍を越えることは出来ぬ、而して其当座に雇主或は有司と条約を結ばねばならぬ、それは本来に於て公共全体の利益よりも寧ろ一派の労働者の利益のみを圖らねばならぬ。労働者及び失業者の大多數の利益よりも寧ろ組合のみの利益を圖らねばならぬ。若し斯くしなければ即ち其存在の特別の理由が無いのである。左れば單に無政府主義、若くは多數の社会黨員を包含して居るといふに止まつて、実に大多數の人民を率いて戦闘の教育し訓練しようという主な効用は失われて了う。

加之、組合は一般社会組織に対する意見如可に拘らず、唯だ其雇主より上等の待遇を得んと望める徒輩の手に委せねばならぬこととなる、そして此徒輩が成べく其主張を穩和に生温るくするのは自然の成行である、是れ第一には其味方とせんとする人々の恐れに逃げ出さないようにする、第二には組合員の増加するに従いて、折角其運動を開始した理想ある人々も、眼前の小利益に拘々たる多數の中に葬られて了うようにするのである。

斯くて總ての組合は、或る程度の勢力に達した時分には、下の如き傾向が発達することが分る、即ち其雇主に対抗するよりも寧ろ之と調和して彼等自身にのみ特権ある地位を獲得しようとする、従つて新たな組合員の加盟や、工場に新徒弟を入ることに、種々の窮屈な制限を設ける、巨額な基本金を積立てるのに熱心になる、之を減少することを恐れるようになる、官権の恩恵を求めることとなる、結局共同組合、相互救済組織中に併吞せられて了う、遂には社会の保守的分子に過ぎなくなるのである。

是に由て之を觀れば予はシンジカリスト（新労働組合）の運動が直ちに無政府主義運動に代り得るものに非ずして、唯だ其無政府主義的鼓舞、行動、批評に指導せらるる時に於てのみ教育及び革命の手段方法として益するものたるを知るのである。

左れば無政府主義者たる者は、彼等自身を新労働組合運動と混同して了わぬよう心せねばならぬ、且つ單に伝道及び行動の手段の一として利用すべき所の者を以て、直ちに其理想目的なりと信ぜぬよう心せねばならぬ、故に彼等が組合に加入するや、唯だ前進的鼓舞刺激を与へべき要素を以て自任しなければならぬ、而して社会革命という目的の爲めに、組合の中より出来得るだけ多所の戦闘の利益を作り出さんことを努めねばならぬ、彼等は新労働組合中に其教育上の感化及び其戦闘力を増進すべき有ゆる物を発達せしむべく働かねばならぬ、即ち思慮の弘通、強迫の同盟工、改宗の精神、官府及び政治家に対する不信と憎悪、雇主と衝突せる個人、或は団体に対する協同の実行である、又一方には彼等は是等組合を私利的、平和的、保守的ならしむべき傾向ある有ゆるものに対抗して闘わねばならぬ——即ち職業的、自負と狹隘なる団体的精神、苛重の義捐寄付と出資の蓄積、救済及び保険の効益、国家の高官に対する信用、雇

主との良好なる関係、有給且つ永久なる役員の任命等である。

此等の条件に於て無政府主義者が労働運動に参加するのは好結果があるに違ひない、併し實に唯だ此等の条件の下に於てのみだ。

斯る政策は、時として或る諸団体の眼前の利益の爲めには有害なる如くに見えるかも知れぬ、又實際有害でもあろう、併しそれは無政府主義運動の問題——換言すれば人類の一般且つ永久の利益の問題から言へば少しも構わぬ、我等も元より革命を期待すると同時に、政府や雇主から出来るだけの自由と安楽とををぎ取ることを希望する、而も我等は或る一時の利益の爲めに将来永遠の利益を譲ること出来ぬ、且つ此一時の利益なるもの、大抵は妄想である、左なくも団体以外の労働者を犠牲とするものである。

我等は自ら省み自ら戒めねばならぬ、労働運動を抛棄した失策は、無政府主義の爲めに大なる損害を生じたるは違ひないが、併しそれは少くとも其特異の性質を其儘変することなくして存せしめた。

若しそれ無政府主義運動を労働運動に混同するの失策に至つては、其危険は一層大なる者がある、それは我等をして彼の議会政策を取れる以後の社会民主党の覆轍を踏ましめることとなる、彼等社会民主党は人数の上には勢力となった、而も之が爲に日々其社会主義を喪失することとなった、我等も亦斯くて多數を得るであらう、而も同時に無政府主義者たることは已まねばならぬこととなるのである。

（注54）マラテスタは1870年ベルヌ大会に於てすでにシンジカリズムを否定している。フランスのCGTは1909年のアミアン大会でシンジカリズム（労働組合主義）を主張するアミアン綱領を採択し、世界の労働運動に大きな影響をあたえ、ヨーロッパ全土のアナキズム運動を二つの対立する陣営にひき裂いた。このあと1909年八月、アムステルダムに於て国際アナキスト大会がひらかれ、フランスのシンジカリストのビエール・モナトとマラテスタのあいだにはげしい論争が行なわれた。このときのマラテスタの主張は同年（1909年）十一月の「フリーダム」紙に掲載された。それがこの小論である。

幸徳秋水は翌年フリーダムのこの論文をみて訳出し、「平民新聞」の第十七号、第十八号に連載した。明治四十一年（1908）二月五日（二十日）である（幸徳訳文は昭和四十四年刊、明治文献社の「幸徳秋水全集」第七巻に小松隆二の解説を付し紹介されている）。

のちにマラテスタの「無政府主義とシンジカリズム」は口語訳にして「労働運動」の昭和二年（1927）七月号に掲載され、それは昭和四年（1929）に地底社（石川三四郎）からマラテスタの論文「無政府主義組織論」の付録として刊行されひろくわが国のアナキズム運動に影響をあたえた。戦後、それは復刻版として群馬・黒色戦線社から昭和四十五年（1970）に刊行されている。